

開城（当時は南側地域）の近くに出ていたのだ。
ついにきた。僕は生きていた。代わりに祖父と
二人の妹は死んでしまった。

鎮魂！ 東三丁目のコムロさん

東京都 木村 親孝

今から五十九年前の夏、昭和二十（一九四五）
年八月九日に、朝鮮・満州国とソ連との国境の随
所から、突如としてソ連軍が侵攻してきました。

その時、私たち家族は朝鮮咸鏡北道慶興郡阿吾
地邑灰岩洞東二丁目四五番地に所在していた、
朝鮮人造石油株式会社の工員社宅に住んでいまし
た。私は、前年の昭和十九年三月に、農圃国民学
校を卒業して人造石油会社直営の炭鉱である、
承良鉱業所に勤めましたが、父の転勤に伴って、
当時は灰岩洞の社宅に家族と一緒に生活をしてい
ました。

その日、会社から「十四歳以上の男性は全員、
工場防衛隊に参加せよ！」という指示があり、夕
方に父と一緒に工場に向かいました。私は、昭和
七年十二月十三日生まれですから、現在の年令の

数え方からいうとまだ満十三歳でしたが、その当時は数え年でしたので当然十四歳になっていて、防衛隊に参加しました。

九日の晩は、灰岩山の麓に近い工場の事務室の机の上で横になり、仮眠をとりました。昼間には朝鮮出身の青年工員の出征を送る壮行会があつて、「萬歳！ 萬歳！」の歓呼の声で見送ったばかりでした。工場からは、大きな木製の弁当箱に入つた夜食が出ましたが、中身は大豆八に対して米二割らしい割合だったので、米粒を拾うようにして食べたことを思い出します。

一応どうにか腹も膨らんだので、外に出てみると、遠い夜空にサーチライトが交差し、高射砲が花火のように撃ち上げられ、空で炸裂しているのが見えました。「あれは、雄基だな！」と言っている大人たちの話し声を聞きながら、一緒になつて漆黒の夜空に繰り広げられている花火ならぬ空襲の実相を見ていました。十日の夜明け前に、工場のパイプ管の下を潜ったり、跨いだりして工場事

務所の前に集合しました。

工場防衛隊員に与えられた武器は、樫の棒の先に鉄製の槍をつけただけのもので、ずんぐりした穂先を見て、武器としての迫力はなく、ただ樫の棒を持った集団という印象でした。当時、成人男性の多くは軍隊に召集されていて、防衛隊員の数は科学の粋を尽くしている大工場にしては少ないなあ、と感じました。

社宅の家族たちは、九日の夜に避難を開始し会寧に向かつて移動をしていました。どうして会寧を差し当たりの避難先としたのかはよく分かりませんが、避難行は三日間の予定といわれ、リュックサックの中身は、それに見合う着替えに、若干の食糧だけでした。十日の夜には、私たちの工場防衛隊員も家族のあとを追つて会寧に移動しました。

会寧へ移動の途中で、追い掛けるように防衛召集がありました。避難して行く家族に追いついた所を、第一川原と呼び、防衛召集者を見送った所

を第二川原と称するようになりましたが、灰岩川の上流は石ころだけの枯れ川でした。灰岩を出て二日目に第二川原に集合した防衛召集者は、大勢の人たちの不安な眼差しに見送られて、うな垂れながら隊列を組んで出発しました。今までですと、出征兵士を見送るときは、「萬歳！ 萬歳！」と日の丸の小旗を打ち振り、軍歌も歌って景気よく送り出したものでしたが、このときはみんな無言のまま立ち尽くしていました。

私は、初めて大人の男性が泣くのを見ました。同じ町内のKさんは、奥さんを数カ月前に病気で亡くされて、小学二年生と、まだ就学前の男の子二人を連れていました。防衛召集者の隊列は出発しながら、Kさんが隊列に加わるのを待っていました。Kさんと残される子供たちを、町内のおばさんたちが取り囲んで、「子供たちをどうするの」と言っ戸惑っているとき、灰岩総合病院の看護婦さんが、小さい二人の子を引き取ると言い出しました。Kさんは、二人の子供を抱き寄せて涙を

流して、看護婦さんに「お願いします！」と言っ泣きました。周りのおばさんたちも、もらい泣きをしながら隊列を見送りました。

防衛召集によって多くの成人男性を失った避難集団は、八月の太陽にあぶられながら、とぼとぼと会寧を目指してひたすら歩き続けました。

「炎天下背に兒 胸に嬰 両手に子」

私たちが会寧に着いたのは、確か避難行三日目の真夜中でした。朝鮮人の農家に頼んで泊めてもらいましたが、母が途中で財布を無くしたことに腹を立てた父は、そこに泊まることを断り「これから歩くぞ！」と言っ、先ほどまで雷鳴を伴っ激しく降っっていた外に出ました。道路のあちこちには水溜りができていましたが、関東軍のトラックが列をなして通るので、道路はこねくり返されたようになっていました。トラックのライトの光で進む方向は分かりましたが、トラックが行き過ぎたあとは漆黒の闇に戻り、前後の人も分らないくらいでした。

このとき、私たち家族は避難集団から離れてしまいました。父と私に体力が無いので、日中は日陰で休むことが多く、いつも集団のしんがりになっていて遅れに遅れていました。母が財布を無くしたことに、父が腹を立てなければ、また会寧に真夜中に着かずに翌日の昼ごろに着いていたとすれば、運命は別の道をたどったことと思います。数えきれないような偶然の重なるの最初が、この夜の出来事でした。

会寧の中心地から少し離れた所にあった、演習地の営舎にたどり着いたときは安心しました。宿営地の門の周辺には電灯がついていて、明るく照らされていました。次々に到着する人々を整理している青年に案内されて、灰岩人造石油の関係者が収容されている営舎に入りました。営舎は真ん中が通路になっていて、両側の板敷きの床には、既に先着の人たちが疲れたためぐっすりと寝入っていました。私たち家族も、それぞれ隙間を見つけてもぐり込み、すぐに深い眠りについてしま

ました。

翌朝、営舎の中で休んでいた人たち全員に対して、人造石油の部長という方が挨拶をしました。その内容は、「会社の責任で、ここまで一緒に行動をしてくきましたが、今後は各自の自由行動とします」ということでした。これからは、個人や、家族の判断による行動となったのでした。

「汽車が出るぞ！」「汽車が出るぞ！」と、山の斜面に並んでいる営舎の上の方から、男の人の叫ぶ声が聞こえてきましたので急いで外に出てみると、どの営舎からも我先にと斜面を駆け下りて来る人々の姿が見えました。私たちもパニック状態になりました。会寧の市内に向かう道路は、避難する人々で溢れていて、道の両側には大小の荷物が散乱していて、リュックサックも点々と転がっていました。私たちの家族も、遅れてはならないと一生懸命に駆け向かいました。

炎上している石油タンクの横を走り抜けるときには、かつて見たニュース映画のことを思い出し

ました。会寧の市街に入ると、駅に向かう人が益々増えて、道路からあふれていました。子供をヒステリックに叱っている母親の声、泣き叫ぶ子供の声、それこそこのことを阿鼻叫喚と言うのだと、習ったことのある言葉を思い出しました。軒下を這うように流れてくる黒煙におびえながら、避難する人々に混じって会寧駅に走りました。メインストリートを過ぎて左へ曲がると駅でした。もうすぐだと思い走っていききましたが、しかし会寧駅はありませんでした。焼け落ちて灰になっている駅舎を見て、そこに集まった人たちは声もなく、ただ茫然として焼け跡を見ているだけでした。私たち家族は、その焼け跡を見たあとに、気を取り直してその場を離れました。避難民の運命は、ここで大きく二つに分かれたのです。

「草いきれ 会寧川に立ちすくむ」

会寧川の鉄橋の下をくぐり、そのまま南下した人たちと川の土手を歩き、豆満江に架かる鮮満国境の橋を渡って、満州に入った人たちとの運命の

分かれ道でした。土手の上で、私たちは父の判断を待ちました。父の声を待っているちよつとの間、私は流れるように鉄橋の下を通って南下する人々の群れを見ていました。そのとき、ふと声がするので見たら、隣家の北村君のお母さんでした。「よろしくお願いします」とのことでした。

北村君のお父さんは耳が悪かったのですが、召集されて兵隊に行っていました。父のいない北村君の家族は、小学六年生の北村君と、年の離れた赤ちゃん、それに北村君のお母さんの妹の息子で、内地から朝鮮に疎開してきた小学三年生ぐらいの男の子の四人でした。おばさんは、胸に赤ちゃんを吊るし抱きにし、背にはリュックサックを背負って私たちの前にきました。すぐに南下して行く人々の流れに誘われるように、土手を駆け下りて行きました。モンペ姿のおばさんは、途中で大きく振り向いて手をふり、鉄橋の下をくぐって私の視界から消え去りました。そのときのおばさんの顔が、一枚の写真になって私の心に残りました。

北村君の家には戦記ものの本がたくさんあって、私もよく借りては読んだものでした。

私たちは「橋が爆破されるぞ！」という話にせき立てられて、豆満江に架かっているコンクリートの橋を渡って満州領に入りました。橋を渡って間もなくすると、ソ連軍の戦闘機からの攻撃を受けました。そこに関東軍の部隊がいたのを狙っての、機銃掃射でした。私たちは農家の壁に体をびたりと着けて待避しましたが、関東軍の兵士の素早い動きを見て感心しました。機銃弾が道路を這うようにして土煙を上げていました。戦闘機が飛び去ったあとの道路には、兵士の姿は見当たりませんでした。

このときの混乱が原因で、私たちは豆満江添いの山中に迷い込むことになってしまいました。道路沿いに散開している関東軍を避けて、左の道を選んだのが、運命の分かれ道となったのです。先に行く人々のあとを、追い掛けるようにして歩き始めました。迷い道に入ったことにはまだ気が付

ずに、足を速めて歩く三々五々の人たちは、心細さからだんだんと集結して、そのうちに集団となってきました。農村の集落を過ぎて、道はだんだんと山に向かっていき、歩く速度も遅くなり、山道には行列ができました。

数日、そのような状態で山中をさまよい歩きましたが、そのうちにだれからともなく、「朝鮮にいた我々は、朝鮮に戻ろう」というような声が出て、相談の結果、再び豆満江を渡ることになりました。現在地は満州国ですが、対岸は朝鮮です。この日は朝鮮人集落の農家に泊めてもらいました。そのときの同じ農家で、隣の部屋にいたのが、コムロさんの家族でした。

翌日、昼近くになって、雇った渡し舟で対岸の朝鮮に戻ることができました。その日は真夏の太陽が照りつける暑い日で、朝から油蟬が鳴き始めて、舟に乗るころには日本で言うところの「蟬時雨」になり、蟬の声を背にしながら豆満江を渡り、満州国に別れを告げました。渡った所は、茂山に

近い所で、地図をたどれば茂山、古茂山、富寧、清津、羅津、雄基、そして阿吾地と経て、懐かしい灰岩にたどり着いたのは、八月三十日ごろだったと思います。

私たちが敗戦を知ったのは、朝鮮に戻り茂山近くの農家に泊めてもらった次の日です。「七日間の休戦」という話が伝わってきましたが、その日の昼過ぎに「日本は負けた」と言っただけで丸腰の兵士からでした。東京と大阪の出身だと紹介した、二人の若い兵士が、「朝鮮服で、ソ連軍の検問所を通り抜ける」と言う話を、水飲み場で父と私は聞いたのでした。「日本は負けました。あなた方も早くここを去ったほうが良いですよ」と言っただけで、その兵士たちは歩いて行きました。上から下まで朝鮮民族の服装に、小物まで朝鮮農民の物を身に着けている二人の話を聞きながら、「スパイかもしれない？ デマだろうか？」と、父は言っただけでありませんでした。しかし、その日が八月十五日であったと身にしみて受け止めました。それまでは朝

鮮人の畑から馬鈴薯パレイシユを勝手に取って食べておりましたが、その日からは朝鮮人の態度ががらりと変わった、「畑の物を取ったら殺す」と言っただけで、部落中に緊張感が漲りました。父と私が畑に入ると馬鈴薯を掘っている所を見付かり、「何をしているのか！ そこに置いて帰れ！」と、朝鮮人農民に怒鳴られ、苦勞して掘った馬鈴薯を、その場に置いて這々の体で逃げたことがありました。

八月十五日から国家を失い、難民になった私たちは、日本に帰ることを目標にした行動に、方針を変えました。茂山から古茂山に向かって歩きまわった。古茂山の山中では、「自分の家に戻ることにしたので、使ってもよい」と言う朝鮮人の好意を受けて、私たちは幾棟もある丸木小屋に宿して、久しぶりに気兼ねのない眠りにつきました。ときどきどこか遠くの方で銃声がしましたが、その夜は気になりませんでした。休養と、これからの行動を話し合うために、その小屋で何日かを過ごすつもりでいましたが、二日目の真夜中、小屋

に近づいてくる銃声に眠れない夜を過ごし、三日には小屋を出ることにしました。

小屋にいるときに私は、夕方になってそっと一人で古茂山の街が見える所の茂みに隠れて、街の様子をうかがいました。夕暮れの街の遠くから、

「萬歳！ 萬歳！」という声が聞こえていました。そして、トラックが列をなして通っていました。日本人がどこかへ連れて行かれ銃殺されるのだろうか？ あの萬歳は、最後の別れの萬歳だろうか」と思いました。目を動かすと学校のような建物が見えて、その広場に二本の柱があつて、旗がはためいていました。赤い旗と日の丸のような旗でしたが、私は理解できませんでした。あとで考えてみると、日の丸のような旗は、朝鮮国旗の大極旗ではなかったかと思ひます。

部落が近いこともあつて、女の人はシャツや指輪などを朝鮮服と交換し、それを着て山を下りました。男性は、それまで持っていた日本刀や剃刀も山中に捨てました。刃物を持っていると、抵抗

の意思があると見られると言われたのです。父は、西洋剃刀を沢に向かって放り投げました。山を下る途中で、色とりどりの朝鮮民族衣裳（チマ・チョゴリ）を着た朝鮮人の若い女の人たちに出会いました。「私たちも不安です。青い目の人と、これから付き合うことになるのですから」と、流暢な日本語で私たちに話し掛けていました。

古茂山の街に入ろうとして、部落の山道から幹線道路に出る手前で、役所に勤めているという青年から、「清津から日本に行く船が出ますよ」と言つて、清津に行くように勧めてくれました。この話を聞いて、私たちは南下する方針を変えて、清津を目指すことにしました。いつの間に着替えたのか、民族衣装の姿はなく、全員日本人の服装に戻っていました。

いくつもの偶然の一つとして、あの日のあの時間に、あの青年に出会っていなければ、南下していたことでしょうし、その先はどうなっていたとか想像もつかないことです。

青年と別れて坂道を下りる途中で、少し広い草地に三本の木を柱にし、その先端をしばり筵を巻いた三角小屋がありました。夜露をしのぐようにと、親切な朝鮮人が建ててくれたものと思われましたが、そこには三人の子供と、その母親らしき人物がいました。ここには駄目だから、清津に向かいなさいと話したら、その母親は、「少し待ってください。すぐ支度をしますから、お願いします」と言って、子供たちに身支度を急がせていました。しかし、私たちは歩く速度をゆるめませんでした。

幹線道路に出て間もなく、遠くの方に集落が見えました。大人たちは、その部落を通らずに清津に行く道はないかと、思案し相談していました。そのとき、ちょうど老農夫が通りかかりましたので、私が朝鮮語の単語を並べてにわか通訳になり、「清津から日本の故郷に帰りたい。近道を教えてほしい」と、身振り手振りを交えて訴えました。それが通じたのか、老農夫は手をかざして教えて

くれましたので、その道を進み再び山道に入りました。不安な気持ちで進んで行くと、山道の三叉路にぶつかり、立ち往生、どの道を進めばいいのか判断がつきません。そのときだれの発案か、「棒を立てて、倒れた方の道を進もう」ということになり、四・五人の男性が立会って棒を立てました。私たち女、子供は息を潜めてそれを見守りました。

「棒切れの倒るる方へ蟻の列」

何という幸運でしょう。棒切れの示した道を行くと急に視界が開けて、遠くに清津の街並みが見えました。幹線道路に出ると、ソ連軍のトラックが列をなして、黄塵を巻き上げながら蔦進して行きました。その度に朝鮮人群衆は、「マンセイ！マンセイ！」と両手を上げていました。胸に赤いリボンを付けている人、赤い腕章を腕に巻いている人もいました。私たち避難民集団も、それに倣って手を上げていましたが、私は手を上げなかった。母が「課長のコムロさんが手を上げてくれるのに、お前はなぜできないのか」と言うので、

私は泣きながら手を上げました。みんなの顔や着ている物は、トラックが巻き上げる埃で黄色くなくなっていました。

清津の街を目前にして、これから街に入ろうとしている日本人難民の幾つもの小集団は、いつの間にか合流して大集団になっていました。その中には私服に着替えた日本軍兵士も、大勢紛れ込んでいました。清津の街に入る橋は破壊されていて、川を歩いて渡ることになって、順番待ちとなりました。そのときに、私の腹具合が急におかしくなってきました。朝食べた馬肉がいけなかったのかと思いました。その朝食の馬肉とは、朝鮮人から軍馬の肉を買い、飯盒で水煮にして食べたのですが、腹痛もあって、やはりこれにあたったのでしよう。

道路上の小高い草むらに駆け込んでしゃがんだそのとき、自動小銃の乱射を受け、周囲の草が切れ、小石がはね飛びビュツ、ビュツと空気を切つて銃弾が飛んできました。驚いた私は、道路下に

駆け下りました。難民の動きを監視していたソ連軍が、向こう岸のトラックの上から威嚇射撃をしたようでした。難民の中から、「止まるな！ ゆっくり歩け！」と叫ぶ声がして、集団は何事もなかったかのように川原に下りて渡っていました。私がそばに駆け寄ったときの父の顔は蒼白で、その白い顔を見て私は何も言えず黙って顔を伏せました。

その夜は、清津埠頭の大きな空き倉庫に収容されました。倉庫内は難民集団であふれていて、コンクリートの床は冷たくて固く、これでは草地の方が楽だなあと思っているうちに、リュックサックを枕に深い眠りに入ってしまった。

翌朝、目覚めた難民の喧騒の中、ソ連軍の将校が通訳を連れて、空き箱の台の上に立って演説をしました。「皆さん、清津から日本に帰る船は出ません。元の居住地に帰りなさい。これはソ連軍司令官の命令です」と通訳は伝えました。難民集団の中から、大きな動揺が起きて不安感が頂点に達

しましたが、どうにもならないことでした。

清津を出る前、何か食べる物はないかと埠頭の倉庫を見て歩いたところ、大豆の入った倉庫を見付けて大喜びをしましたが、腐り始めていてがっかりでしたが、その日の朝食は腐りかかった大豆を炒って食べました。元の居住地に戻るために、日本人街を通りましたが、市街戦があつたらしく建物には無数に銃弾の跡があり、街中は散乱状態でした。母は埠頭の倉庫で真綿を見付けて、自分の体力以上の荷物を作り欲張ったのですが、これが後々大きな助けになりました。拾い物をしながら移動している人の中で、防空壕に入ったところ、短刀で自決している母親と子供を見たという人もいましたが、私はそうした場面には遭いませんでした。

市街では、ソ連兵、朝鮮人、そして難民の日本人集団と、三種の人々であふれていました。ソ連兵が日本人の集団に向かって話し掛けてきて、「ヤポンスキー？ ヤポンスキー？」と、初めて

聞くロシア語で言っていました。私服で避難民に紛れ込んでいる日本兵士が、「あれは、日本兵はいないかと聞いているのだ、だれも口をきくな」と、声を低めて回りを威圧するかのごとくに言っていました。

私も、いろいろとごみ漁りをして、瓶詰めのかの塩辛とか、新品の雪駄を拾いました。ソ連軍将校の演説を聞き、埠頭倉庫で漁ったり、日本人街での拾い物などをして歩いていたので、郊外に出て間もなく昼になりましたが、そのときはまだ難民は大集団で、大きな事務所の建物にみんな入って休憩していました。この休憩時にTさんの赤ちゃんが息を引き取りました。みかん箱を拾ってきてお棺の代わりにし、Tさんと母が近くの丘に行つて素手で掘った穴に箱を埋めました。私は二人に付き添って行きましたが、帰り道で母は「親孝！ この橋が目印だから、橋の名前をしっかりと覚えておくのだよ！」と、私に強い口調で言い、「かならず、迎えに来るから」と小さい声で言っ

て、Tさんと母はまた涙を流していました。

「埋めし嬰へ小石積み置く木下閣」

ソ連軍の司令官からの命令で、以前の居住地に帰るといふ安堵感もあって、途中の海岸の風景などに目を移すゆとりもあつた行動でした。そのときまでは、ソ連兵の恐ろしさがまだ分かっていませんでした。

羅津には真夜中にたどり着き、すぐにソ連兵の案内で埠頭の管理事務所のような建物に入りました。そこでは、女のソ連兵がカーシヤ（ロシア粥）を出してくれて、ゆっくりとした気分で寝ることができました。しかし、翌朝早く、男性の大人たちは全員使役と称して連れ出され、残った女、子供は、そこから追い出されて、線路を横切つて満鉄の無人になっている社宅に入れられました。二日経つても使役に行つた男の人たちは戻ってきませんでしたので、一応、残された者たちだけで灰岩を目標して出発することにしました。

収容されていた満鉄社宅から羅津駅までは一本

道で、駅前を過ぎるともうそこは郊外です。父がいないのだから私がしっかりしなければと、気持ちは気負っていました。自分の体の三倍もあるような荷物を背負っていると、体の方が言うことを聞かず、駅前を過ぎるころには早くも顎を出してしまいました。ちょうどそこに、ソ連海軍の中型トラックが止まり、私たちを乗せてくれるというので、溺れる者藁をも掴むのとおり、女の人や子供たちは次々に荷台に乗りました。しかし私は、まだ軍国少年の気概が残っていましたので、負けず悔しさをあらわにして、乗るものかと泣き叫びましたが、おばさんたちに荷物ごとトラックに引き上げられました。雄基に向かう峠道を走るトラックの上で、初秋の風を受けてしだいに涙が乾いてゆく清々しさに、意地を張って泣き叫んだことが恥ずかしくなり、みんなに背を向けて、周りの流れゆく景色を見ていました。雄基の街に入る手前でトラックから降ろされました。

私たちは、雄基の街に入ることを避けて、阿吾

地へ向かう道路に出ました。先ほどの体験から、ソ連軍のトラックが来るとみんな手で手を上げて乗せてもらいました。荷台の腰掛けに座った私たちに、ソ連兵が黒パンを分けてくれました。今でもその黒パンの酸っぱい味を懐かしく思い出します。

灰岩の街に近づき、灰岩山の麓にある炭坑夫住宅の前で降ろされましたが、すぐに保安隊員がきて、炭坑の社員独身寮「炳義荘」に連れて行かれました。その有様を近所の朝鮮人が遠巻きに見ていて、何かしら怒鳴っていました。そこには先着の大家族が休んでいました。我が家の家族は二階の右側の部屋に入れられました。そこは畳の間で、久しぶりの日本間の感触に安心感が漲り、同室となった三家族は早々に横になりました。コムロさんも一緒でした。私は疲れもあつてすぐに深い眠りに落ちましたが、真夜中ごろに部屋の中を歩く人の気配を感じて目が覚めました。

私は薄目を開けて部屋の中を見回すと、母が妹をしつかりと抱き寄せているのが分かったし、お

ばさんたちも息を殺して体を固くしているのが感じられ、これはただ事ではないと直感しました。

私はそのときもまだ軍国少年の魂が息づいていて、「よし！ 何かあつたら相手の喉を咬み切つてやろう！」と、全身に殺意を漲らせて、薄い掛布団の中で相手の首を抱き込もうと腕に力を入れ、口を大きく開けて待ち構える姿勢をとっていました。そのときに手が私の頭に触り、次いでマツチを擦る音がしました。相手は私の顔を確かめようとしたのですが、私も瞬間のマツチの炎の明かりで相手の顔を見ました。それは大人になりきつていない若い男の顔でした。童顔のソ連兵は私の顔の上で手をひらひらと振つて、マツチの炎を消していました。その瞬時に見たのは、驚愕した少年兵の顔で、すぐに彼は部屋から出て行きました。

後年に、お化け屋敷というのを見聞して、私の顔の上で手を振って足早に部屋から出て行った、若いソ連兵の行動の謎が解けた思いをしたものでした。マツチを擦った一瞬の明かりに浮かび上が

った、殺意にぎらぎらと燐光を放っている私の目にぶつかって、彼自身も恐怖を感じて、最初の目的の気持ちも萎えてしまい、早々と部屋を出て行ったものだろうと推測しました。

しかし、そのときのソ連兵が、もし成人兵であったならば、今の私は生存していなかったかもしれないと考えることもできます。やはり、それも幸運であったということでしょうか。

そんなことがあってから、収容所にいるおばさんたちが、用事があって一人で外出するようなきには、母に、「親孝さんを貸してください」と頼んで私を伴って外出するようになりました。また、薪集めや以前の知り合いの家を訪ねるときなどにも、ボディガードを頼まれていました。

現在、中学一年生の孫を見ていると、当時の私の護衛役はあまり心強いものではなく、大人の気休めぐらいの役にしか立っていなかっただろうと思います。しかし、何事もなかったことは運がよかったのだと思います。

九月に入って間もなく、清津で強制的に使役に連れ出された男の人たちも、無事に戻ってきましたので、炳義荘を出て、農耕洞の勤労報国隊の宿舎に移りました。ここは、朝鮮人勤労報国隊員が入っていた独身寮でした。

私はそのころ、迫って来る冬に備えて、薪集めや越冬の食糧を確保するために、農家へ物乞いに出掛けたりして忙しく過ごしていました。ある日、コムロのおばさんに頼まれて、一緒に東三丁目の社宅へ行きました。おばさんが「ここが私の家よ」と教えてくれた社宅は、全体が焼け落ちて外壁だけが残っている無残なものでした。おばさんは焼け跡の中でしばらく佇んでいて、平穏の日を思い出していたのか、懐かしそうに周りを眺めています。私は所在なく屋根を失った部屋から空を見上げていました。そこには、何事もなかったことく澄んだ秋の空がありました。

おばさんは、その行き帰りに私にいろいろと話し掛けてきましたが、私は聞き役だけでした。

「女学校のときが一番楽しかった」と何度も繰り返して言いましたが、私にはおばさんの女学生時代のことは推し測ることのできない別世界の話でした。女学校の思い出を語るときのおばさんは、女学生に戻ったように見えました。

「秋風や 鉄帽点々草の中」

拾ってきた鉄兜を鍋代わりにして高粱を煮ていたとき、コムロのおじさんが父に、「僕はもう駄目です。妻子を頼みます」と言ったのを聞きました。

父と並んで腰を下ろしているコムロのおじさんは、病人には見えませんでした。煉瓦を重ねただけのカマドの火に照らし出された父とおじさんの顔は赤く、特におじさんの目は朱色に光っていて、熱があるような様子でした。しかし、私はそんなに深刻な話とは思わずに聞いていたのです。

咸鏡北道の秋は短く、限られた日を数えながら、せき立てられるような思いで毎日を過ごしていました。私は阿吾地周辺の農家を回って、物乞いをしていました。時期は秋の収穫期でしたので、馬

鈴薯や朝鮮南瓜をもらうことができ、ときには粟をもらうこともありました。かつての軍国少年も、そのころは乞食に成り下がっていました。屈辱感で一人泣いたこともありましたが、食べる物を得ることが当面一番大事なことでした。一学年上の嶋崎さんは、物乞いに出掛ける私たちに、「当たって砕けろ！」と言って励ましていました。彼のその言葉を呪文のように唱えて、農家の庭先に入り、戸口の前に立ちました。

「物乞ふに オモニ黙して秋の暮」

十月の初旬、ある日の夕方に、「コムロさんの所に豆腐を届けて」と母に言われた私は、小皿にのせた一丁の豆腐を持ってコムロさんの部屋を訪ねました。部屋に入ったとたん、私は立ちすくんでしまいました。温突オンドルの焚き口の近くに寝ているおばさんは、顔も手も水ぶくれになって、鉛色に変色していたのです。眠っているようにも見えましたが、「おばさん！ 豆腐です。食べてください」と言って枕もとに置くと、おばさんは目をつむっ

たまま、「ありがとう」と小さな声で返事をしました。
た。

翌朝、「コムロさん一家が死んでいる」と言っている大人たちが声を潜めて話しているのを聞き、私は一人でコムロさんの部屋に行きそつと中を見ると、昨夕には気が付かなかった奥の部屋に、おじさんと長男のマサオ君、そして次女の赤ちゃんの三人が横たわって死んでいました。部屋の中は物が散乱していて、その中に埋もれているような様子でした。おばさんは昨夕と同じに、入り口の部屋で胸の上に手を置いたまま寝ていて、私が届けた豆腐は手付かずのまま枕もとにありました。おばさんは息をしませんでした。

「枕頭の豆腐四角や 秋の朝」

晩秋の日が、まぶしく収容所の白壁に当たっていました。長女のノリコちゃんが一人生き残っていました。虎刈りの坊主頭になっていて、着ているワンピースから細い足を出して壁に背をもたれかけて、つぶやくように、「月の砂漠」を歌って

いましたが、体を温めているようでした。

「肌寒や 少女の歌う銀の鞍」

そのことがあってからしばらくして、私がいつものように農家に物乞いに出掛けるときに、ノリコちゃんを見掛けましたが、それが見納めでした。以前、食堂だった所は、什器、備品がなくなって大広間のごとき空間になっていましたが、ノリコちゃんはその板敷きの広間を大儀そうに歩いていました。体はやせ細っていて、まるで汚れたワンピースが歩いているように私の目には映っていました。だれが与えたのか、左右形のちがう板のように薄くなった、大人の女下駄を履いていました。

「秋深し 坊主頭のワンピース」

その日から間もなくして、ノリコちゃんが死んだということを知りました。筵むしろに包まれて運んだということでしたが、埋められた場所は多分、農耕洞社宅の奥の灰岩神社近くの墓地だろうと思います。コムロさん一家は、こうして一族全員が亡くなってしまったのです。

「そぞろ寒 孤児は筵に包まれて」

当時、私たち避難民の間では、「一家全滅」という言い方がありました。この灰岩収容所で一家全滅という悲劇をもたらしたのは、主に母子家族でした。夫は召集されて軍隊に行つたまま、残された母子家族は過酷な避難生活を過ごすということで、その運命は多種多様でした。

私たちの身近なところでも「母親と幼児」、「母親と子供二人」の一家全滅という出来事がありました。また、「母親と弟妹三人」という例もありましたが、これは子供四人のうち、一人生き残った小学生の男の子がいたので、一家全滅とはなりません。この男の子は面倒を見る人がいて、生きて無事に日本に帰りましたが、この子は幸運な方です。

その後、私たち家族は炭坑住宅に近い悟鳳洞の収容所に移されましたが、そこで家族全員が熱病にかかり、大変な難儀をしました。

そして、我が家族にも最大の不幸が襲つてきま

した。大黒柱の父が、その熱病によつてあえなく亡くなつてしまったのです。

「春疾風 ボタ山裾の土饅頭」

昭和二十一（一九四六）年十月初旬、私たちはジャンクという帆船を闇で雇つて、雄基から海岸に沿つて南下し、十一日目に無事に三十八度線を越えて注文津にたどり着きました。注文津では、アメリカ軍によつて難民キャンプに収容されてやつと落ち着き、精神的にも肉体的にも久しぶりのびのびとして、数日を過ごしました。

忘れもしない十一月十一日、注文津からの引揚船で佐世保港に上陸、日本の地を踏みました。しかし、やつとの思いで日本本土に帰ることのできた人々には、これからの生きていく苦労の旅が待っていました。もちろん私もその一人で、あの朝鮮での避難行動と似たり寄つたりの辛苦をなめる日々となりました。だが、どんな苦労の中にあつても、私はコムロさん一家のことを忘れたことはありませんでした。だんだんと世の中が落ち着い

てきて、私の生活もどうか軌道に乗ってくるに従って、ますます鮮明に当時のことが脳裏によみがえってくるのです。

悟鳳洞の難民収容所にいたときに、シベリア送りを逃れて、難民として私たちと一緒に収容生活をしていた元日本兵の方がいました。Sさんと言っておりましたが、多分偽名かもしれませんので、素性は分かりません。コムロさん一家にも、Sさんにも、無事に帰国することを待ち侘びていた親族の方々がおられたことでしょうか。

昭和三十四年に施行された、「戦時死亡宣告」によって戸籍から抹消されて、未来永劫その存在が認められなくなってしまうか、あるいは外地未帰還者（行方不明者）として、政府の記録に残っているのかよく分かりませんが、いずれにしても哀れなことです。

私が少年のころ、日清戦争や日露戦争の話を聞いても、遠い昔話のように思いました。それと同じように戦後生まれの人たちには、私の話は昔話

に聞こえるでしょう。しかし、私にとっては、あの戦争は昨日のことのように思われます。

渡鮮した年の夏、西水羅で張鼓峰事件に遭遇し、敗戦を北朝鮮で迎えたことは、歴史の中の一齣とも言えますが、歴史の現実についてこのように体験を語ることができるのも、敗戦後の数々の幸運と、多くの人々に助けられて生き永らえることができたためです。それらの人々には国境を越えて感謝するのみです。

人生には、事故や病気という不運もありますが、戦争は個人の人生を国家が切断するという残酷なものです。そして、生き残った人たちにも、限らない苦悩と消すことのできない傷を心に残します。人間とは、愚かな存在です。他民族と他者を犠牲にして利益を得るといふ罪悪を、いつになつたら自覚できるのでしょうか。現在も、国家間の争いがあり、民族紛争にしても、宗教紛争にしても、人が人を殺すことが日常的に行なわれています。哀しいことです。

私も古希になりました。老人の長話を読んでくださいます。ありがとうございます。

コムロのマサオ君とノリコちゃんが、今も羅津に向かう砂利道を、泣きながら歩いていきます。私の胸の中に、二人の少年と少女が、泣きながら歩いていきます。

「裸足の子 越えし異郷の幾山河」

鎮魂！

北朝鮮平康・興南から引き揚げて！

千葉県 山田敏夫

まえがき

終戦直前の私は、朝鮮半島の中ほどにある江原道の公立国民学校の訓導に任じられて、平康という小さい村（邑）に新設された、国民学校に勤務していた。あの八月十五日の敗戦で、在平康開拓団の家族を主とする人たちと共に、三十八度線で南下したが、そこで北朝鮮保安隊によって止められ、再び北上する列車に乗せられて元山まで運ばれ、そこで全員降ろされた。私は興南にいる家族のことが心配で、興南に戻ることを決心して一人で北上し、ようやくのことで家族に再会し、その年の冬を興南で越すことになった。

平康開拓団の人たちは、元山にしばらく留まっていたが、その後三十八度線を無事に越えて、釜山までたどり着いたことをあとで知った。